

# エジプト文明の源流とユーラシア

## 研究の総括

浜本隆志\*

### The Origin of Egyptian Civilization and Eurasia -Overview of the Studies-

Takashi HAMAMOTO\*

## 1 はじめに

筆者は本プロジェクトの研究者として2013年からかかわってきたが、その研究成果をここでまとめておきたい。文化財の保護は文明や文化史の研究を抜きには考えられないので、論文では古代エジプト文明をキーワードとし、その歴史や伝播を掘り下げて研究してきた。過去5年間にわたる本プロジェクトに関する論文は、本論を除いて4本であるが、まずこれらのタイトルは次のようである。

- 1 ナポレオンの地中海域遠征と「アンピール様式」——パリにおける古代エジプト・ローマ文明—— [浜本 2013]
- 2 古代エジプトにおける「シンデレラ物語」の世界伝播（1）——ヨーロッパ伝播を中心に—— [浜本 2014]
- 3 古代エジプトにおける「シンデレラ物語」の世界伝播（2）——アジア伝播を中心に—— [浜本 2015]
- 4 エジプト神話と史実における近親相姦の問題（1）——神話編—— [浜本 2016]

これらの論文の概要はすでに紀要に英訳しておいたので、関心のある方は参照されたい。さらに第2論文と第3論文は、まとめて河出書房新社から2017年に、『シンデレラの謎 ——なぜ時代を超えて世

界中に拡がったのか——』のタイトルで単行本として出版した。これも今回のプロジェクトの研究成果とすることができるであろう。

## 2 各論文の要約

まず第1論文を要約しておこう。ナポレオン・ボナパルト（1769–1821）は、フランス革命の混沌とした激動期に青年将校として頭角を現し、執政政府の筆頭「統領」を経て、ついには皇帝（1804）に登りつめた。かれは19世紀前半のヨーロッパ史のなかで、重要な軍事的、政治的役割を果たしたので、一般にナポレオンの「英雄伝説」が流布している。たしかにかれは、フランス革命を収束させた立役者といえるが、しかし現実の顔は好戦的な覇権主義者であり、野心家であった。

かれの指揮官としての特質が顕在化したのは、北イタリア派遣軍の司令官時代（1796–97）である。ここで軍事的実力を認められたナポレオンは、ついでエジプト（シリア）遠征（1798–1802）を試みた。こうした地中海方面への派兵は、対仏大同盟やイギリスの植民地政策への牽制を意図したものであったが、そのみならず派兵は、フランスに文化・芸術面でも古代エジプトやローマ・ブームをひきおこす。これがアンピール様式といわれる芸術潮流であり、別名では新古典主義様式とも称される。対象は絵画、建築物、室内装飾、家具、陶器、装身具など多岐の

\* 関西大学国際文化財・文化研究センター（Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture, Kansai University, Japan）

領域にわたる。

アンピール様式のアンピール (Empire) は、フランス語読みで帝政の意であり、英語ではエンパイア様式 (Empire Style) となる。しかし発祥の地がフランスであるので、通常、フランス語風に発音される。狭義の意味におけるその時代区分は、ナポレオンが皇帝として活躍した1804-1815年とされるけれども、広義においてはさらにその前後の総裁政府時代と幽閉時代を包括する1800年から1820年までを指す。

本稿ではナポレオンのイタリア、エジプト (シリア) 遠征とアンピール様式の成立プロセスを確認し、それが具体的に絵画、建築、記念碑、紋章、家具、日用品のなかでどのように形象化されているのかを考察した。ナポレオンはこの様式を駆使して民衆の人心を掌握し、ヨーロッパ制覇の野心を実現していったが、その結果、パリに古代エジプト文明や古代ローマ文明が歴史的遺産として残されることになった。このアンピール様式は、フランスの芸術・建築史の分野で一時代を築いただけでなく、政治的にナショナリズムや植民地主義を醸成し、さらに現在のツーリズムとも深くかかわっていた。

第2論文では『シンデレラ』の類話を取り上げた。一般に、ディズニー (1901-66) のアニメ映画でこれを知った人が多いが、そのモデルは、フランスの童話作家、ペロー (1628-1703) の『サンドリヨン、あるいは小さなガラスの靴』であった。しかしペローは明らかにイタリアのバジレ (1575-1632) の『灰かぶり猫』を下敷きにして『サンドリヨン』を書いたし、ドイツのグリム兄弟 (兄ヤーコブ1785-1863、弟ヴィルヘルム1786-1859) の『灰かぶり』は、バジレやペローのメルヘンに大きな影響を受けて採話した。ヨーロッパやアメリカの事例でもわかるように、これらは伝統的にバジレ、ペロー、グリム、ディズニーという連鎖のなかで継承されたメルヘンといえよう。

ところがそのルーツをたずねてみると、『シンデレラ』の類話は欧米だけでなく、古代エジプト、西南アジア (トルコ、アラビア、インド)、東アジア (チベット、ジャワ、中国、朝鮮、日本)、北米 (ネイティブ・アメリカン) など、世界中に分布していることがわかる。

すでに先行研究が示しているように、『シンデレラ』の類話が歴史的に何の関係もなく自然発生的に各地で生まれたものでなく、ルーツの話が相互に密接な影響を受けながら、伝播したものであったことは確実である。それには多様なヴァリエーションがあるとはいえ、一般的にいえば、苦境にあるヒロインが超

自然的な援助者の助けを借りて、「玉の輿」結婚をするというプロセスが基本構造になっている。

その代表的なものとして、筆者は古代エジプト版『シンデレラ』といえる『ロドピスの靴』伝説を取り上げた。ギリシャの歴史家ヘロドトス (前485ごろ-前420ごろ) がこの話を紹介しており、それをたどっていけば、このルーツは紀元前5-6世紀ごろまでさかのぼることができる。

したがって第2論文では、古代エジプトの『ロドピスの靴』にみられるシンデレラ的なモチーフや特徴に注目し、これを構造分析しながら、なぜこの話その後、世界中に伝播したのか、グローバル化の理由はいったい何に起因するのか、これらの問題の考察を試みた。その結果、『シンデレラ』の類話は、エジプトをルーツとし、古代ギリシャ、イタリア、フランスを経てドイツへ伝播したという、ヨーロッパの経路がほぼ実証できたと思う。

その延長線上に、第3論文が位置づけられるが、『シンデレラ』の類話はヨーロッパだけでなくさらに広範にアジア全域に伝播したのではないかと考えられる。したがって本論文ではユーラシア大陸のうち、アジアルートの解明をおこなった。具体的にはベルシャ、チベット、中国、ミャンマー、朝鮮半島、日本などの『シンデレラ』の類話を追跡したが、これらの国々においても、物語が驚くべき類似性を示していることがわかる。実際のところ、遠く離れたエジプトやヨーロッパとアジアにも、結婚によって苦境の状況から脱出し、最後にハッピーエンドを迎える共通した筋の展開がみられるからである。

このような世界各地に多数存在する『シンデレラ』の類話は、いったい何によって生みだされたのかということが問題になる。筆者は、かつて20万年前にアフリカにいたとされるホモ・サピエンスが6-7万年前に世界各地へ移動したとする、ホモ・サピエンス単一民族移動説に注目した。それを手がかりに、アフリカの『シンデレラ』の類話がホモ・サピエンスの世界各地への移住の際に、この話が伝播したと推測し、論を展開した。第3論文では物語構造からその類似性を検証し、具体的に相関関係を証明した。

第4論文では、エジプト神話や史実において近親婚の話が頻繁に語られるが、なぜこのテーマがクローズアップされるのかを問題にした。ここではとくにエジプト神話を中心に検討した。

一般に神話では近親相姦の話が世界中に拡がっているが、たとえばエジプト神話でも、イシスとオシリスは兄妹婚をしており、さらにギリシャ神話でもウラノスとガイア、クロノスとレア、北欧神話でもフレイ

ルとフレイア、日本神話でもイザナギ、イザナミといった、すべて兄妹婚である。古代日本において妻を妹（いも）という言い方をしたが、これは兄妹婚の名残といえる。なぜこのような話が神話において、世界各地で展開されるのであろうか。

この問題の先行研究としては、日本では吉田敦彦氏の『神話と近親相姦』があるが、ここではおもにギリシャ神話についての婚姻や近親相姦の関係が論及されている。すなわちこれらは、世界創造のプロセスにおいて不可避な行為であるとされるが、支配が確立した後ではそれは断罪されるものとして描かれている。たしかにギリシャ神話の系図を見ると、神々の近親婚や近親相姦のオンパレードであることがわかる。

しかしこのような慣習に抗するインセスタブー（incest taboo、近親相姦の禁忌）も、先史時代から広く経験論的に存在した。さらに類人猿や動物の世界でも、近親相姦の禁忌が存在することから、おそらくはホモ・サピエンスにおいても、多くの場合、古代から近親相姦の禁忌は厳しく守られていた不文律であったと考えられる。それにもかかわらず、なぜか近親相姦は神話においても史実においても、神々や王侯、特定の部族に限定されておこなわれていた。

まず神話の成立について考えてみると、どの地域でも古代において支配権力の成立（王朝）と深い関係にあった。神話は支配権力の確立の後、生みだされるのが原則であったからだ。すなわちそれは支配の正当性を神話によって実証しようとしたからである。第4論文における近親相姦も、たんなる興味本位からでなく、創設されたファラオの王権の正当性を示すことに主眼が置かれていたといえる。したがって神話の本質を考察する場合、この原点をたえず念頭にに入れておかねばならない。その意味において、神話や王族の近親婚と一般民衆の近親婚の禁忌という一般的な結婚形態には、大きな相違が認められるのである。

要するに神話や王侯の近親婚は、性の問題というよりは、むしろ血の純粋性を示すことに主眼が置かれていたといえる。こうして神々はその正統性を主張し、神をルーツとする王朝の権威の維持をはかろうとしたのである。総論的にいえば、近親相姦は自然の嵐に似てこれまでのカオス状態から支配の秩序を生みだし、新しい王朝の体制を作るためには必要であった。しかし一度秩序ができあがると、そのあとは異常なものは神々の世界から排除され、禁忌される。ここに近親相姦の2重の秘密が隠されていたのである。

### 3 研究成果の単行本化

以上の論文のうち、第2論文と第3論文をまとめて河出書房新社から、『シンデレラの謎——なぜ時代を超えて世界中に拡がったのか』のタイトルの単行本として出版した。これも先述のように、今回のプロジェクトの研究成果のひとつということができるであろう。その要旨は以下のようである。

従来、『シンデレラ』はヨーロッパが発祥の地であって、ペロー、グリム兄弟の作品に論及されるのが常であった。その延長線としてディズニーのアニメ映画が成立したものと信じられてきた。そして『シンデレラ』の研究に関しても、ヨーロッパを基軸にした研究がなされ、さらに守備範囲を広げたルースやシイドウたちの昔話研究者でも、シンデレラ譚をインド・ヨーロッパ語族の地域に限定して研究をおこなってきた。本書ではその通説を覆す、さらに広域にわたる伝播地域の分析を試みてきたものである。

その際、民話を調べていると、2500年ほど前に『ロドピスの靴』という、『シンデレラ』ときわめて類似した話が、エジプトに存在していたこと知って驚いた。なぜ古代にシンデレラ譚があったのか。この謎を解くためには、民話を文学作品として限定して分析しても、その全体像は見えてこないのではないか。全貌を把握するためには、民話やメルヘンという枠を取り払い、歴史学、民俗学、神話学、文化人類学という多面的かつグローバルな視点が必要になると考えた。とりわけアフリカ単一民族起源説を、世界伝播の基軸に置くことによって、『シンデレラ』の類話研究の新しい地平が拓けるものと思ったしだいである。

シンデレラ譚の構造をもう一度、ホモ・サピエンスの歴史に照らしてみると、出アフリカから世界各地への大移動の際に、これは幾多の困難を経ても、それでもなお幸せを追求する人類の夢と希望のプロセスをあらわしたものであったことがわかる。不運な母の死、継母のいじめ、苦しい生活、超能力をもった救済者の登場、そして高貴な人と結婚というハッピーエンドのストーリーは、大胆に筋をそぎ落とすと苦境から脱出して幸せになるという風に、単純化できる。

世界的視野に立っていた南方熊楠は、今から百余年前の1911年に、「西暦9世紀の支那書に載せたるシンデレラ物語」のなかで、中国とヨーロッパの『シンデレラ』の親近性に着目しており、9世紀に記録されている中国の方がはるかに古い話であることを看破していた。熊楠はさすがすばらしい慧眼をもっ

た学者であったといえる。それを可能にしたのは、狭い専門領域にとどまるのではなく、他分野の学識に裏打ちされた、かれの世界観によるものであった。

日本においても『シンデレラ』の類話である『落窪物語』は、平安時代の10世紀には成立していた。また民話の『糠福米福』の伝来時期は不明であるが、ヨーロッパ系『シンデレラ』が人口に膾炙する以前から、これらが日本において書承や口承のかたちで広範囲に伝わっていた。たしかに近代日本は、明治維新以降、欧米文明導入の一環として、ヨーロッパの『シンデレラ』を本格的に受容してきた。ただ本書で強調したいのは、欧米文明ありきという先入観でなく、それ以前の各地域の固有の文化のなかに『シンデレラ』の類話が存在していたということである。

こうして『シンデレラ』の類話の歴史の変遷をたどっていけば、ヨーロッパのそれらは、世界伝播のたんなる一系譜であったことがわかる。それ以前にアフリカやアジア地域で話が成立していたことは明らかであるが、それがほとんど世に知られていなかったのは、ローカルな民話であったからである。それに対して欧米の『シンデレラ』の類話が世界を支配したのは、近代における欧米優位の世界観と深く結びついていたからだ。その視点から、ここで『シンデレラ』と欧米の世界観との関係に触れておく必要があろう。

現在、欧米の『シンデレラ』の類話がもてはやされているのは、ヨーロッパ文明が先鞭をつけたアジア、アフリカ、南北アメリカ支配の帰結であった。植民地時代、帝国主義時代においてはヨーロッパ文明が主導的役割を果たし、ヨーロッパ中心主義がまかり通っていた。だから『シンデレラ』もヨーロッパ生まれであり、それが各国に伝播したものであるということがまことしやかに信じられてきた。

あわせて『シンデレラ』の類話は支配権力となったブルジョワジーのポリシーであり、イデオロギーとも合致した。すなわちそれは、男性は勤勉に働き、女性は家庭を守るという前提で、もし女性が困難な状況に直面しても、家事をまじめにこなしていると、愛する伴侶を得て結婚をすることができる。『シンデレラ』はこういう幸福追求の成功モデルであり、しかもこれを、結婚を介して次世代へ継承していくというメッセージも込められているのである。

ヨーロッパ文明を受け継いだアメリカは、アメリカンドリームをポリシーにした。それはディズニーの『シンデレラ』演出のなかでも追求され、その夢は現在ではディズニーランドという空間で継承的に展開されている。このようにみていくと、『シンデレ

ラ』の類話の歴史は、きわめてグローバルな広がりをもっていることがわかる。その意味において、古代エジプトの『ロドピスの靴』をクローズアップすることは、重要な意味をもっていたといえよう。

## 参考文献

- 浜本隆志 2013「ナポレオンの地中海域遠征と『アンピール様式』——パリにおける古代エジプト・ローマ文明——」、『The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture (関西大学国際文化財文化研究センター紀要)』、第1巻、81-112。
- 浜本隆志 2014「古代エジプトにおける『シンデレラ物語』の世界伝播(1)——ヨーロッパ伝播を中心に——」、『The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture (関西大学国際文化財文化研究センター紀要)』、第2巻、141-161。
- 浜本隆志 2015「古代エジプトにおける『シンデレラ物語』の世界伝播(2)——アジア伝播を中心に——」、『The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture (関西大学国際文化財文化研究センター紀要)』、第3巻、149-188。
- 浜本隆志 2016「エジプト神話と史実における近親相姦の問題(1)——神話編——」、『The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture (関西大学国際文化財文化研究センター紀要)』、第4巻、107-119。
- 浜本隆志 2017『シンデレラの謎——なぜ時代を超えて世界中に拡がったのか——』、河出書房新社。